

くまもと面白漫遊記

～嶋村広報委員のおすすめのこの町・この人～

No.22

玉名地区

伊倉はやるばい！「笑い」がキーワードのまちづくり

～仁○加から出発した伊倉の一区一輝運動～

伊倉に似合うのは、笑顔。

かつて港町として賑わった伊倉の原点がそこにある。

地区に伝わる郷土芸能「伊倉仁○加（にわか）」。

そう、あの大衆演劇「にわか」がまちづくりの大きな柱になっているのだ。

笑い、ふるさと、暮らし。

ユニークでかつ「人」が中心のコミュニケーションを大切にした伊倉のまちづくり。

玉名市の一区一輝運動、伊倉はやるばい！



史跡説明版板設置作業



伊倉子育て広場



伊倉ふれあい仁○加館

玉名市伊倉、かつての港町として歴史にその名を残す町である。有明海、菊池川、その地理的な好条件の下で水運の拠点として栄え、南蛮貿易や国内で初めて大砲が陸揚げされた地としても知られる。また、伊倉南北両八幡宮の大祭など個性的な伝統文化を育み、独特の生活圏が築かれてきた伊倉地区。

しかし、史跡は残るが人は残らない。戦後も、玉名といえば「高瀬より伊倉が面白い」と言われたが、近年、次第に賑やかさを失い、商店街には空き店舗が目立ち始めていく。

かつての伊倉を知る人々なら余計に「こんなもんじゃない！」という気持ちになるだろう。その意気込みを感じるのが今回、取材した皆さんである。

県内各地にある「まちづくり」とは少しばかり趣が違うまちづくりが進んでいる。そこには『笑い』という「まちづくり」では初めてのキーワードがあったのだ。

嶋村裕介広報委員（株式会社 島村組）はユニークな取り組みを行っている伊倉地区の皆さんに注目、KUMAKEN取材班を引き連れ、伊倉まちづくりの拠点となっている場所へと案内した。

その施設の玄関に掲げられた文字をみて驚いた。『伊倉ふれあい仁〇加館』とある。熊本の大衆芸能「仁〇加（にわか）」と「まちづくり」、一体、どんな風に結びついているのだろうか？



舞台



はじまったば〜い！ 伊倉仁〇加でまちづくり

『伊倉ふれあい仁〇加館』は、伊倉商店街の一角、商家の趣が残る空き店舗を無償で借り受け、玉名市がすすめる校区単位のまちづくり「一区一輝運動」の助成事業として改装され、今年、4月にオープンした。伊倉のまちづくりの拠点、住民の交流の場、地区外の人が訪れるビクターセ

ンターとして機能している。

さらに、母屋の庭越しになんと、舞台がある。さすが伊倉仁〇加の活動の拠点、熊本県内、いくつか地方に「にわか」の保存会はあるが、常設館ともいえる施設があるのはここだけである。

集まっていたのは伊倉のまちづくり委員会のメンバー。伊倉の一区一輝運動は、まちづくり委員会の町を知ることから始まった。

まずは、まちづくり委員会委員長の小山武之さんにお話をうかがった。

嶋村委員 Q：委員会が活動をスタートさせる間、いろんな調査をされたようですが？

小山さん A：少子化、高齢化がすすむ伊倉を活性化させるための計画づくりは、伊倉の特色、文化遺産を知るため、改めて地区を調査、タウンウォッチングを行うことからスタートしました。



まちづくり委員会委員長 小山さん

おかげで仁〇加の他にもたくさんの発見

をすることができましたし、地区の住民の方とも歴史的に貴重なものなどについて語り合うワークショップを重ねたことで、住民の意識も高まりました。

まちづくり計画の全体像を歴史、自然など地域の見直し、掘り起こすことから始めたことで、伊倉の資源の現状を知り、伊倉のまちづくりに何が大切かを見つけることができました。

嶋村委員 Q：伊倉まちづくりのテーマとは？

小山さん A：まちづくりに大事なのはいろんな世代の「人の交流」です。

「人の交流」を中心としたまちづくり、つまりソフトを充実させることです。地区の特性を生かしてお年寄りから子どもまで笑顔で暮らせる交流のまちづくりにテーマを決めました。



『歴史を学び未来を語る ふれあい笑顔のまち・伊倉』です。

人の交流事業、いわゆるコミュニティ再生事業には3つの大きな柱があります。それが『まつり衆にわか衆』『ふるさと塾』『暮らし応援隊』です。伊倉の歴史

文化など特性を生かし、教育、暮らしなど幅広い年代が協力して取り組む地域づくりをしていこうと計画づくりをしました。



コミュニティ再生《再生》事業の3つの大きな柱の一つ、『まつり衆にわか衆』について『まつり衆にわか衆』の部長で「伊倉仁〇加保存会」発起人顧問でもある田畑久吉さんに話を聞いた。田畑さんは、故郷伊倉への思いを込め、こう語った。

嶋村委員 Q：田畑さんがまちづくりに関わった理由は？

田畑さん A：しばらく伊倉を離れていまして、数年ぶりに故郷の伊倉に戻ってきた時、目に映ったものは伊倉の過疎化と自然破壊でした。元気がない、賑わいを取り戻したいと強く思いましたね。



田畑さん

そこで、伊倉両八幡宮の節頭馬など伊倉の伝統文化の振興、保存に力を入れました。以前、盛り上がった伊倉仁〇加も復活できないかと思ったんです。



仁〇加の公演

嶋村委員 Q：伊倉では以前から、にわかを？

田畑さん A：伊倉には、昭和30年代までにわかが盛んで劇団も8組あり、舞台や通りでも演じていました。

10年前までは、伊倉にも「にわか」をやっている方がいたので、伊倉仁〇加を守りたいと平成6年に「伊倉仁〇加保存会」を立ちあげました。

《笑い》でまちづくり、伊倉の仁〇加の復活が地区の活性化につながると思いました。

結成から7年後、タイミング良く市の一区一輝運動がスタートしたんです。

田畑さん等の努力下で平成6年に結成された「伊倉仁〇加保存会」には、地区の様々な職業の方が参加、活動をスタートさせた。衣料品店を営む日田 匠（ひだたくみ）さんは仁〇加のメンバーで役者、保存会の事務局長をつとめている。



仁〇加の公演

嶋村委員 Q：どんな方が保存会のメンバーに参加されているのですか？

日田さん A：商店主、農業、会社員など職業も様々。現在、メンバーは15人、青年団の時から「にわか」をやっているメンバーが殆ど。年間12～3回の公演活動を行っています。2年前から小中学生の総合学習で仁〇加の指導をしています。故郷の文化の継承と保存、後継者育成にも役立っています。



日田さん

嶋村委員 Q：伊倉仁〇加の特徴は？

日田さん A：伊倉仁〇加には三原則がありまして…。「男性だけで演じる」「下ネタは使わない」「観客に話しかけない」。



子供仁〇加

嶋村委員 Q：今年、賞を獲得されたとか？

日田さん A：4月、15団体が参加して行われた「第1回肥後にわかアマチュアコンクール」で伊倉仁〇加保存会が1位の優秀賞に選ばれました。今後の励みになりましたね。

嶋村委員 Q：そして、来年はすごい計画があるそうですが？

日田さん A：全国の「にわか」を伊倉に集めて『全国にわか交流大会 in 伊倉』を開催しようとして計画しています。各地のにわかの競演、にわかの台本コンクール、全国にわか学会など、伊倉で初めての全国規模のイベントになります。

嶋村委員 Q：それは楽しみですね。
「笑い」をキーワードにしたまちづくり、伊倉仁〇加が果たす役割は大きいですね？

日田さん A：この「伊倉ふれあい仁〇加館」の完成で活動の拠点ができたことで、幅広くメンバーを集めることができます。
「笑い」をキーワードとしたまちづくりを地区内外にPRしていくことができるようになり、その話題性が商店街の活性化につながれば嬉しいですね。
また、子どもからお年寄りまで、仁〇加を通じて交流が深まれば笑顔のまちづくりが広がると思います。
何よりも大事なものは、長く続けていくことだと思います。

日田さんの表情には、仁〇加を守り続けるという自信が見える。伊倉ふれあい仁〇加館での公開練習などで住民の伊倉仁〇加への理解が広がれば、「笑い」をキーワードにしたまちづくりがどんなものか、その輪は二重にも三重にもなるだろう。伊倉仁〇加の存在は、地域文化の伝承と同時に、各地のまちづくりに力強いヒントを与えてくれたに違いない。

はまるばい！ 子どもからお年寄りまで笑顔で暮らせる 伊倉のまちづくり

続いて、伊倉まちづくりの柱となる『ふるさと塾』と『暮らし応援隊』は、まさに人の交流を目ざす伊倉の生活を支える取り組みといえる。『ふるさと塾』の塾長・松本重美さんと『暮らし応援隊』の部会長・松葉敏明さんに活動状況をうかがった。

嶋村委員 Q：『ふるさと塾』とはどんなことを？

松本さん A：『ふるさと塾』とは、伊倉の歴史文化や地域を案内できるガイドの養成講座と「ふるさと学習会」を開いています。
昨年の12月から月1回、10人前後で行っています。
たとえば、お寺の住職さんを講師に迎え、隠れキリシタンの話をさせていただいたり、伊倉がどんな町だったのかを知ることで、子どもたちがふるさとを愛し、大人たちはふるさとに誇りを持ってもらうことが目的です。
また、史跡を紹介した「歴史案内板」を昨年、町内11ヶ所に設置しました。
今後、イラストを入れた史跡マップなどを制作する予定です。

嶋村委員 Q：歴史史料を後世に伝えるということでも意義がありますね？

松本さん A：史料を次の時代へ残すのも役目。伊倉には語り継ぐべきものがあり、語り継ぐ者、人材を育てるということです。



松本さん

嶋村委員 Q：『暮らし応援隊』も人材養成が大きなポイントですね？

松葉さん A：『暮らし応援隊』は、要するに「困った時はお互い様」ということなんです。家と家のつながりがなくなってしまった時代、お隣同士で助け合っていきましょう。これがテーマです。

「おねがいありがとうセンター」を核にしたボランティア活動が中心となります。一人暮らしのお年寄りを訪問したり、子育て中の若いお母さんの家庭を訪問したり、また、本を読んだり歌を歌ったり、話し合いをしたりする「ブックスタート」活動など、福祉サービスを行うボランティアを育て、地域で支えあう活動を目指しています。いわゆる「共生の場」をつくろうとしてるのです。



観光案内板



勉強会

嶋村委員 Q：活動の反応はいかがですか？

松葉さん A：子育て広場を4回程開きましたが、1回目、2回目と徐々に参加するお母さんたちや家族が増えています。

子育て中の若いお母さんの悩みを出し合ったり、仲間づくりがすすんでいます。まちづくりの原動力となるのは「仲間づくり」。これが人々の生まれ育った伊倉の



松葉さん

良さの再認識につながり、「生きる誇り」へとつながっていくのです。

嶋村委員 Q：各部会の活動、それぞれに重要ですね？

松本さん A：それぞれの部会に人材がいるんです。

松葉さん A：伊倉のまちづくり活動は、住民の意識の高さにあると思います。

歴史的な背景があり、伝統を生かしつつ新しいことに取り組むことができる。その根底に伊倉に対する誇りが感じられるのです。高井さんの力も大きいと思いますけど。

取材の最中も資料を提供してくれたり、話をまとめてくれているのが伊倉まちづくり委員会の事務局長・高井信彦さんである。一級建築士でもある高井さんは委員会のスポークスマンとして、地区内外へのまちづくり事業のPRにつとめている。

嶋村委員 Q：高井さんの委員会への思い、ご苦労など聞かせて下さい。

高井さん A：玉名市の一区一輝運動は、13校区の地域間競争なんです。

正直、よその校区に負けたくないという意識もあります。

当初、商店街の再生を無理してする必要はない、「暮らしや環境を良くする」まちづくりをめざした方がいいと考えました。

「笑いとコミュニティ」これをキーワードとしていることが、価値観の違う世代間の交流を生み出し、商店街の活性化にもつながってくると思います。

玉名市13校区の中で最初に仁〇加館をつくることができましたし、今後も、清和文楽館にも負けられないような「仁〇加館」を創り上げるのを夢に、頑張っていきます。



高井さん

■伊倉ふれあい仁〇加館 ☎0968-72-7767

■伊倉まちづくり委員会 ☎0968-73-8860

(事務局 高井)

ユニークな仁○加でまちづくり、その根底にしっかりした計画と故郷への愛

嶋村委員・取材を終えて

新聞やTVで幾度も取り上げられた伊倉の「仁○加でまちづくり」。そのユニークな取組みは、マスコミの絶好的といえます。しかし、今回の取材で「伊倉仁○加」ばかりが表に出ているが、その根底にしっかりしたプラン、ふるさと塾や暮らし応援隊の皆さんの地道な活動が事業を支えていることがはっきりと分かりました。

さらに、事業に携わる皆さんの故郷への並々ならぬ愛情、これには脱帽です。

人材が豊富で、しかも、皆さんのしっかりした計画性と実行力がその愛情の裏づけでもあります。港町、商人の町として栄えた伊倉のあの時代の夢を、委員会の方たちは私たちにを見せてくれるかもしれません。期待しています。



嶋村さん

KUMAKEN 9月号特集

「サンドブラスト・ガラス工芸の新たな魅力に挑む」

～ガラス工房遊瑠璃～

取材において白砂委員が作成致しましたKUMAKEN特製キーホルダーの当選は次の方

西田 郁代 様 西田建設㈱